

多摩 CB10 周年 堀池喜一郎の書き残し

堀池喜一郎

多摩 CB の世話人として「この 10 年を振り返り」を書き残した。
この 10 年間のエピソードを
発足前の【CB 蠢動】、立上げ時の【波紋】、メタ化される【実践】
人のつながり【展開】の 4 フェーズに分け、
自分が“感動し忘れられない” 14 編とした。

同じ感動が更に沢山ある。私のブログを検索して見つけて頂きたい。

- ・ 始めの一步塾&ブログ村 (<https://infoippo.tamaliver.jp/>)
- ・ 堀池喜一郎 すこやの工作室日記 (<http://blog.livedoor.jp/sukoya2008/>)

目次

(CB 蠢動期にあったこと)

1. 八王子お助け隊前川氏「15 年間探していた” 内需” があった」。
2. 三鷹方式「官民意思疎通」は拡げられると思っていた。
3. 人車倶楽部フェアに参加してアジア大八田さんとの地域連携。
(はじけた波紋)
4. 「リーダーをやめてプロデューになりなさい」横石トーク影響力。
5. 小平シンポで「遅れた行政の意識どうしたら」に答えた波紋。
6. 長島さん「1000 人の CB 志願者名簿欲しい」目標は簡単と直感。(三鷹から怒涛の伝搬)
7. 三鷹のプレーヤーの Look West (ずっとシンポ最大参加者)。
8. 「始めの一步塾」の調布版を展開し手応えと地域差を実感
(実践がメタ化発想される場、多摩 CB)
9. 各地の講座、フォーラムで「有償化」「3 ガイ主義」の概念受ける。
10. 多摩 CB らしさを暗黙知で共有する「拡大世話人会」合宿。
11. CB の中間支援者について考えた。「専門性とモチベーション」
(多摩 CB で逢えるすごい人)
12. 「WORK SHIFT」第 3 種の人発見 (松江さん出合い)。
13. 基調講演講師と活動評価を共有する。高野さんと懇親会。(人のつながりを展開)
14. 人がつながる展開を分科会で確認。「CB ブロガー」「2 地域居住」。

【CB 蠢動期にあったこと】

1. サイバーお助け隊前川氏「CB は 15 年探していた “内需” だ」

2009 年の三鷹での第一回シンポジウムの開催が決まって、シニア分科会のパネリストを依頼しに行った。サイバーシルクロードお助け隊の前川さんの八王子のオフィスで快諾を頂いた。

まだ CB の概念をご存じない状況で説明をしたら、「自動車部品輸出で活況だった八王子周辺製造業は、内需開拓をしなければと叫んできて、15 年間何も成果がない。CB はついにそれが出てきたのかと感動」とのこと。私は八王子らしい見方があるのかと受け取り方に感動。

多摩 CB 発足にまつわる「CB とは」のエピソードの一つである。

2. シニアが地域に参加する三鷹市の「協働のまちづくり」。

多くのシニアがアクティブシニアになるように、1999 年から NPO を設立して応援してきた。一般に高齢者は一人でもる人、趣味のサークルで満足する人が多い。個人の意識もあるが、社会の側つまり行政や周りの人が意識的に働きかけてその気にさせないといけない関門がある。

【「ただならぬオジサンしよう」で始めたシニア地域活躍の応援】

NPO 法人シニア SOHO 三鷹の場合、テーマを絞らずに「誰もが得意技を発揮する」としたために目標が解り難かった。

そこで「ただならぬオジサンしよう」というキャッチフレーズを会の概念とした。これに面白いがる 70 人のシニアが結集した。「昔のこと、会社員時代の余生を送る “ただのオジサン” から脱却して新しいこと、これからの人生を始める」という方向付けをして関門を開いた。

【NPO に結集して行政・企業と協働のノウハウ事例】

地域支援の仕事を NPO が協働事業で行えたことは意義深い。特に市役所教育委員会の「学校芝生化の芝養生管理」（年間 1 千万）「学校

安全推進員」(年間3千万)がそれである。三鷹市にあった「協働の街」という気風をさらに強くした事業活動が次々に行われた。

商社・丸紅と市役所が高齢者活性化コンソーシアムを組み、シニアNPOが事業に参加する、

製薬企業・エーザイとNPOが組んで行う地域包括支援センターの認知症予防活動、

NTTのソフトウェア開発を三鷹市が実証する事業「まち歩きSNS活用」、厚労省の地域助成事業「高齢者孤立防止ききがき活動」など。

【コミュニティスクール起点のまちづくりに参画】

三鷹市では文科省のコミュニティスクール(地域運営学校)方式を全小中学校で導入している。この推進ではスクールアドバイザー(授業協力者)が多数教室に入り、各種クラブ活動(竹工作クラブ、囲碁クラブ、吹奏楽など)を生徒と市民の合同で行う運営が盛んだ。

その結果、多数のシニア市民が「学校起点の地域活動」で学校の内外で活動している。

こうした行政の仕掛けがあり、NPOに結集したシニア市民が仕掛けに乗る、双方が作り合い「三鷹方式まちづくり」になっている。私はこの三鷹方式が周辺の他市でも出来ないはずはないと考えていた。

3. 三鷹のNPOが多摩地域へサービス提供した亜細亜大との連携。

多摩CBの活動よりも前に、私は三鷹市を超える広域の地域連携の経験をしたことがあった。2008年ころ、私が代表であった任意団体・どこ竹武蔵野三鷹は市内で竹とんぼ講師育成活動(年間30回、1000人有償参加)を展開していた。ある日亜細亜大学地域連携担当の八田さんが連絡をくれた。

武蔵野市にある自動車教習事業者が「人車倶楽部」という地域防災安全地域活動を展開しており大学が協力している。そのお祭りに「どこ竹」が教室出店で加わってほしいという話である。

結果として十数人のシニア竹とんぼ講師が参加して150人の子どもたちに教室をする楽しいイベントを実施した。それは数年間継続した。

市を超えた事業であってもニーズがあれば、他市の企業→他市の大学→三鷹の団体・どこ竹という連携をした経験は、武蔵野市在住の講師を中心に、三鷹で展開しているノウハウ、人脈を活用して行うというパターンである。これが多摩CBで、同じようにどこでも実行されると私は予測した。そして実現したのである。

【はじけた波紋】

4. 「リーダーやめてプロデューサーになれ！」横石さんの基調講演。

「ここにお集まりの地域でリーダーシップを発揮されている方々に提案を申し上げたい」。2009年の第1回シンポジウムで横石さん（徳島県上勝町[いろどり]社長）は基調講演を切り出したので、参加者は身を乗り出した。

130人ほどの会場を埋めた参加者は多くは女性たちで大半がまさに「私はリーダー」という意識で、CBをどう進めていくのかを聞きに参加していたように思う。

横石さんは「葉っぱビジネス」が盛んになる前の数年間の苦勞を語り始めた。

町のシニア女性たち大勢を何度も先進地へ、バスに乗せて事例見学旅行しても、現地では「すごい内容」と感動しているばあちゃんたちが町に戻った翌日には必ず「でも私はできないよ」と挨拶に来るのだという。その繰り返しを何年もしていた。

苦勞が続く中で気が付いたことがあった。集落の農家を訪問して歩いている時、Aさんというシニア女性とその隣に住む年恰好が同じBさんが居た。実は良く話してみると、その二人が生まれ、育ち、もの見方が全く違うのに驚いた。

Aさんはあることを白いと見てもBさんは黒いと見ることが多い。例えば葉っぱを大量に採集してガンガン稼ぎたいAさんに対してBさんは多く稼がなくていい。他人がやらない特殊な草の採取が得意で、

少額でいいから楽をして少額の収入が上がればよいと考えている。

こういう違いがあるのならば「みんなでガンバロー！」という掛け声ではなく、毎日の連絡に「ガンガン稼げる〇〇の案件あります。面倒な△△葉を採る話もあります」ときめ細かく指示すれば、それぞれが持ち味を発揮して工夫することができる。

成功した事例として葉っぱを運ぶトレーが共用で町が供給するのをやめて各自が作ることにした。するとばあちゃん達は見事に葉っぱ毎に違うトレーを手作りし、作業効率が高まったという。

町では排気ガス減少のために、ごみ収集車を廃止していて各自が町役場の収集場所へ持参する方式をとっている。ゴミの回収時間帯を24時間にしたら、それぞれが夜中とか早朝とかに持ち込む。生活スタイルが一人一人全く違う生活をしていることが分かったそうだ。

他人と違うようにすることが楽しく工夫できる。そうした違い発揮こそがシニアの特性なのだと横石さんは理解した。Aさん、Bさんに声かける誉め言葉を横石さんは日々心がけている。その代わりに集落ばあちゃん達から横石さんは「銀座で最高のホスト！」と呼ばれているとか。

要約して横石さんが語る「リーダーが声をかけて一斉に人を鼓舞する時代は終わっている。一人一人のシニアの特性を見分けて違う言葉をかけ、異なる役割を果たさせる、演劇の監督のようなプロデューサー以外に人を動かすことはできない」

このまとめの言葉を借り、シンポジウムの終わりに「懇親会では横石さんと“プロデューサーになるには”を語ろう」と呼びかけた。予想を越える90人が参加した。

横石さんが講演の中で「大阪の料理屋の裏口で水をかけられて転び怪我をして帰った話」がある。高級料理屋での葉っぱの利用の実際を聞き出そうとして覗き叱られたのだ。帰宅して「こんな努力がいつ報われるのだろうか」と泣いたら、奥様がなぐさめた「私が経費を出します。お客になって料理屋の表から聞きに行きなさい」と。

三鷹のシンポジウム会場では多くの参加女性が顔にハンケチを当てて講演を聴いていたのが印象に残る。

多摩 CB の合言葉になっている「プロデュース力を学ぶ」はここから始まった。

5. 「遅れた行政の意識を変えるには」の質問に答える。

2010 年小平市で NPO「Mystyle こだいら」主催の CB フォーラムが初めて開催された。私はパネリストで参加してシニア SOHO 三鷹の活動を紹介した。

質問があり玉川上水緑地の落葉堆肥化事業をしている女性から「小平市役所の市民事業への反応が鈍い。どのように行政と付合えばよいか」という意見だった。

私は「三鷹で NPO は地域を越えて活動する。小平に拘らず隣の国分寺市と連携して活動すればよい」と発言した。同じパネリストだった当時の市長さんが「他市の事情を参考にするのはどうか」と不満げな発言をされた。

これを取材した小平の地域新聞が翌朝「NPO は理解ある他市で活動すればよいという議論も」という見出し記事になった。

主催の NPO の代表竹内さんは市の企画部へ記事が出たお詫びに訪問したそうだ。そうしたら全く逆の反応があった。企画部はこの記事が出て、小平市役所職員を刺激するものと高く評価、シンポジウムの成果大と喜んでくれたという。

これ以降企画部と NPO の関係が出来上がったという後日談に私は感動している。

6. 「1000 人の CB 志願者リスト作成」は簡単なことに思えた。

多摩 CB が発足するにあたり、世話人会の会議では当面の目標の設定が話題になった。

私は当初、世話人活動もビジネス的に貢献する活動だから年 1000 万円くらいの経費をかけて活動するものと思っていた。原資を金融機関が出すとすれば「見返りの効果として何が実現できれば良いのか」

を多摩信用金庫の長島さんに質問した。

答えは明快で、「1000 人分の退職シニアの CB 志願者のプロパティ」だった。その 1000 人を具体的な融資先の事業と結び付ければ大きな事業になると考えられたのだと思う。

その時に私は「簡単な目標だなあ」と感じた。

なぜなら私が少し前まで運営していた NPO 法人（シニア SOHO 三鷹）の活動で、シニア活動家のプロパティ（氏名、住所、メールアドレス、出身企業、経験職種、したい活動、現在の活動）を 500 人規模ですでに把握していた。多摩 CB ネットワークが稼働すればすぐに 2000 人は把握できると思ったのだ。

特にシニア SOHO ではシニア向け IT 講座の中で「ホームページ検索講習」を日常行っており、その講座の中で受講生シニアのプロパティが面白いように鮮明になっていたからである。

世話人の議論の中で、この 1000 万円の活動経費が金融機関から提供される方向に進まなかったから見送られた。

しかし 10 年経た今、多摩 CB に関わる多摩信用金庫はこの活動で得た CB 志願者の名簿とプロパティは、おそらく万を超しているだろう。そして金融機関として事業に結び付けた成果は膨大なものになると私は想像する。

多摩 CB の発足時を思い出すと私には忘れられない数値の一つである。

【三鷹の実践が伝搬する】

7. 三鷹市の CB プレーヤーたちの「Look West」

多摩 CB 第一回のシンポジウムが三鷹市で開催されたから三鷹市在住の参加者が多いのは当然であるだろう。しかし、その後のシンポジウム参加者を地域別にみると、第 4 回の一橋大のシンポまで、三鷹関係者がずっとダントツトップだった。私はそれが不思議でもあったが誇らしく感じ、毎回数えていた。

なぜ、三鷹の活動家が多摩 CB に参加が多いのか。CB が三鷹では盛んだからではないと思う。私は逆に、三鷹の地域活動のある特徴を感じる。

それは三鷹の地域活動の“Look West”である。

もともと三鷹市民は自分を多摩の人間（つまり“東京都下”）とは思っていない。多くの活動で隣接の杉並区、世田谷区、練馬区の進んでいる活動に参加擦るのは普通だった。

しかし、慣れてきてその活動を自立しようとするとき、三鷹だけでは需要が少ない。そこで仲間づくり、顧客づくりの目を東から西（調布、小金井、多摩市、西東京）の方に転じたのである。

多摩CBに、三鷹のメンバーはそういう目で加わっているように思えてならない。シンポジウム開催地が三鷹→武蔵野→国分寺→国立→八王子と少しずつ西へ移動した動きに興味深く参加し続けたのが三鷹市民CBプレーヤーなのである。

むろん、八王子以降のシンポジウムではトップの座を他に奪われている。それはCBの意識が多摩全域に普及したいま、当然のことだろう。

8. 「始めの一步塾」の調布版を展開し手応えと地域差を実感。

多摩CBの事業として当初の数年間「推奨事業」の展開が行われた。

2010年から三鷹で、私が代表の三鷹CB研究会が展開していたICT活用講座「始めの一步塾」を多摩CBで「推奨事業展開」した話を紹介しよう。

「始めの一步塾」はICT（ブログ発信）を活用し仲間・顧客づくりを進める手法を学ぶ2時間×3回の講座。三鷹市内で20回ほど開催して好評だったので、2010年から調布市内でNPO「調布アットホーム」が主催・集客して三鷹CB研究会が講師をして数年間開催した。

三鷹の講座では退職シニア、主婦のCB志願者が多かったが、調布では自営業者が多かった。これは「ちょうふどっとこむ」が中小企業者にPRをしたことで市内の企業の利用者が講座を受講してくれたためだ。

そのため、ICTの初歩を教える苦労はなく、受講者の多くがすぐに独自のブログサイトを立上げ、事業活動に役立てる事例が見られた。

しかし三鷹市内と住民構成が同じに思える調布市では、シニアの参加が少なく、シニアCB活動の立上げが行えなかったのが興味深い。

この要因の一つは、シニア向けにICTの初歩を教える「シニア情報

アドバイザー」の活動の有無によるのであろう。三鷹市にはアドバイザーが100人規模で存在し、調布では2、3人という違いである。

このように、広域での推奨講座を展開する場合は地域特性があることを講師が理解して進める必要を感じた。

一方調布の展開が成功することで、三鷹では同じころ始まった、広域で受講者募集をした三鷹市主催の内閣府助成事業「身の丈起業塾」のカリキュラムに「始めの一步塾」が採用されるきっかけになったのである。（この事業で「三鷹CB研究会」は500人を超えるブロッガーを育成した）

【実践がメタ化発想される場、多摩CB】

9. 各地のCB講座、フォーラムで「有償化」「3ガイ主義」概念を伝搬。

2011年から多摩CBネットワークの浸透に比例して、私のところに講師、講座の依頼が増えてきた。「CBとは」の解説よりも実際の地域ビジネスでの失敗や成功の体験をお話した。

なかでも、参考になったと言われるのがNPOシニアSOHOにおける「無償活動をしなさい」というノウハウが多くのNPOや任意団体に喜ばれた。羽村市の講座ではワークショップで「ケーススタディ有償化の議論」をして喝采を受けたのでその後各地でも同じケースを実施した。

もう一つ話題になった実践ノウハウの概念化が「3ガイ主義」。

シニアの地域活動で必要なのは

「生きがいを感じる得意技を生かす」

「褒められ感謝されるやりがい」

「自身の輝いていることを発信するナイスガイ」

の3つの「ガイ」が揃うことである。という事例説明。

特に「ナイスガイ」はきめ細かく自分の活躍をブログやSNSで発信する活動のことで「謙譲の美德から脱しなさい」ということが賛同を得る。

国分寺での講演で市民活動部長が賛同と発言され、多摩市の生涯学習課長さんが「公民館でのCB講座実施」を決意・実行され、多摩市の関戸公民館では情報発信方法を学ぶ内容を含む同講座が数年間続き200人規模のシニアがCBに挑戦している。

このように必要に迫られて実践したCBのノウハウ「有償化」「3ガイ

主義」が、多摩 CB のおかげで伝搬させるときに「メタ発想化」されて肉になり血になり広がる実感を得ることができた。

10. 多摩 CB らしさを暗黙知で共有する「拡大世話人会」合宿

「拡大世話人会議」という合宿イベントを多摩 CB の世話人会は時々行う。2011 年には東日本大震災の被災地・茨城県ひたちなか市を訪問して CB 活動を見学しようとなった。

その回は視察内容が濃くてブログ記事を沢山書かなくてはならない内容で、私は写真 250 枚、動画を 50 本撮っていた。楽しいし、有益でもあった雰囲気を紹介したい。

【阿字ヶ浦お魚市場と民宿】

もうお魚市場に客は戻っている。すいているので今が観光客として狙い目。海の幸の美味しいものがありさすがに沢山食べてしまった。

震災の被害状況は、復興しているが想像以上にひどいもの。来てみないと解らない。風評被害が大きく地域産業が大変なことになっていると身にしみた。

那珂川へりの和菓子屋さん。すごく美味しいスイーツ「イチゴダッペ」買える。被害の写真をとるな、発信するなという切実な声がある。それをはるかに超す「安心への取り組み、復興の進み」の記事を書いてほしい、ということに共感する。

泊まった和風「丸徳旅館」の対応は素晴らしい。海の幸の夕食、朝食は美味しい。宿の自慢は「ハマグリのお吸い物」「メヒカリなどの地元魚」。

【圧巻！海浜鉄道湊線という電鉄会社の伝統の街での奮闘】

震災で数百所の線路を破壊された。地域に残る鉄道の赤字を何とか黒字にして残そうという運動があり、その社長を買って出た公募でなった社長・吉田千秋さんが大変熱烈な鉄道のプロ。震災から復旧し、ひたちなか市・那珂湊地区のヒーローである。

私は以前近くの日立市に 20 年住んでいたのに旧那珂湊市をの歴史など殆ど知らなかったと気が付いた。そこには観光開発の歴史や農業、漁業のテーマが沢山あり、開発努力に感動。

長野県や群馬県に比べれば未発達な茨城と旅館主は言うが、努力工夫があり面白かった。東京都心から1時間半で着くとはいえ、田舎の寂れた町が生き残ってゆく熱意と素朴なホスピタリティに沢山出あった。

【がんばろうニッポン！】

丸徳旅館の専務・薄井豊さんのしていることは、日本中でやるべき「がんばろう日本」、「あきらめない」努力だろう。

多摩CBの世話人会議の議論は、夜に旅館の一室で行った。

ひたちなか市の高齢の女性のNPO法人「くらし協同館なかよし」見学と塚越教子理事長のお話を聞いたので、大変有益だった。

後期高齢者支援の地域の課題解決への取り組みを多摩で進める方法議論が出来た。大いに勉強になる2日間だった。

こうした2日間を通して、多摩地域の広域の人たちが「暗黙知」で話が通じる仲間になることが実は一番大きい。だから、多摩CBでは合宿を時々する。

11. CBの中間支援について議論。「ノウハウとメタスキル」

2012年11月22日の多摩CBネットワークの「中間支援応援プロジェクト」では講師として参加し考えた。面白かったので再録し紹介する。

基調講演した「調布アットホーム」の石原代表。支援を受ける側の「調布アイランド倶楽部」の丸田さんが成功事例だ。

会場に詰めかけた、中間支援の皆さんに、石原さんはこう呼びかけた。

「コミュニティビジネスは地域を豊かにする必要な存在か」

「中間支援組織は必要か」

グループ討議のすべてが、それらを「必要」という結論になった。

そこで石原さんの問題提起に私は質問した。

「必要だ!」という思いが成功をもたらすのか。

あるいは、中間支援者が具備しているスキルが成功をもたらすのか。

私の質問に石原さんは答えた。

「我々はスキルを何も持っていない。またスキルは必要ない」

「しかし、最後まで諦めないでやる、納得するまでやる気持ちでいる」

「我々は、無償活動しているが、CB 推進のネットワークである」

一見、観念論に聞こえる。が、私はここに重要なポイントがあると見た。調布アットホームは、想いを実現しようとする人のネットワーク。この人たちは、かなりな各分野のプロフェッショナル。それがネットワークをなす、無償活動する理由がある。

「目的が実現する楽しみ」を目指すモチベーションが続いている。

そのモチベーションが続くための方策を、彼らは持っていると言える。それはなにか。

石原さんは講演で述べた。

我々はフューチャーセンターというモノと多分同じだろう。だが、多くのフューチャーセンターは、ファシリテーションをこなすことで終わっているのではないか。

調布アットホームはファシリテーションスキルは無くてもいい。その先のビジネス、夢の実現を獲得すればいい。

CB のプレイヤーが、テーマのアイデアをもっているが、まだ立ち上がっていないときに、中間支援者が鼓舞する、情報を提供する。これが、石原流の「あきらめない、納得するまで議論する」である。

マスコミのライターである石原さんの、持っている分析力、取材力、構成力は、その議論の中で、プレイヤーに対して「新たな視点」「突然変異を見つける」力を与えるのではないだろうか。

一言でいえば「メタ発想」を持つ、持たせる、ということである中間支援者が、プレイヤーと同じ視点で、繰り返し努力をするお手伝いをしてはいけないのだ。悩みを共有などしているだけではいけないのだ。

ネットワークが持つ、多様なプロフェッショナルを組み合わせ、「メタな見方、行動」を議論し、格闘しながら紡ぎ出すのである。

私のグループの討議の中で、西東京の A さんが言った。

プレーヤーである自分から見ると、一般的なビジネススキルなどの解をもたらす中間支援を求めている。自分のテーマに役立つ解、それを持ってきてもらいたい。

「私に、個別に」なのである。

で、あれば、中間支援者は特定のスキルを持つなどは論外である。少なくとも、「私の必要性を満たす」のであるから、スキルは持ちようがない。

それよりも、「メタ発想をする」というメタスキルが必要なのである。専門性や、人脈を持つアットホームの構成員野モチベーションを高めながら、新市場のスキームの見通しを、メタに見て発想するスタイル。それが、中間支援者の真骨頂になるだろう。

プロジェクトの会場に来ていた、若い中間支援者の皆さん、長島さん流に言えば、行政マン、信金は中間支援者であると言う。彼らはそういう発想で、自分の中間支援のあり方を考えているだろうか。

「私に、個別に」を対応すると言いつつ通せとした人が、「いろどり」の横石社長である。リーダーではなくプロデュース力が必要、という多摩CBの発足の理由からして、中間支援者のメタスキルなのである。

こうした「ノウハウ」「モチベーション」「メタスキル」の整理ができて、私には大変有益だった、今回の多摩CBイベントに感謝する。多摩CBの真骨頂は「メタスキルの醸成ができる」にある。

【多摩CBで逢えるすごい人】

12. 基調講演講師と活動評価を共有する。高野さんと懇親会。

2013年1月。多摩CBのシンポジウムで高野誠鮮さんの講演。

「腐らない米をちゃんどつくり欧米基準で売った」

「野菜の価格は生産者=農家が決めて高く売る」

「過疎だから、最先進のことができる」

「オランダ程度にやれば、68 億円輸出になる」

その方法は、

「徹底してやるべきことを、考え抜き、実行する」

「人に役立つことをする=役人」

「邪魔する人は時間の無駄。相手にしない」

「この世の自然に、役立たないものは無い。それを殺す農薬は要らない」

「人は、死ぬことで、新たな人を産む。沢山人を産む人になりたい。それを愛と言う」

こういう人である。懇親会でさらに語った。

「よそ者、馬鹿者、若者が古い地域を改革する」と言われるが、今の社会の問題は根深く複雑で改革派簡単ではない。私は加えて「曲者」が必要だと思っている。

“曲者”とは、何があってもその活動をやめない人間である。羽咋市では私1人が曲者をするしかなかった。それで改革ができた。今日は多摩CB来て感動した。ここには数十人の“曲者”がいるではないか」

その講演から5年。多摩地域はどうかを高野さんにもう一度見て欲しい。

13. ヒーローは「第3のWORK SHIFT」人間・松江勇武さん

多摩CBとは。400人のコミュニティビジネス・パーソンが集う、400万都市「多摩」の希望の星たちである。

その中でも燦然と輝く、毎年、その年一番のヒーローが輝いて出てくるという現象が続く。私は勝手に、自分の空想の中で毎年のヒーローをつくりあげているのだが・・・

2009年：NPO M y s t y l e こだいら 竹内千寿恵さん。

2010年：調布アットホーム 石原靖之さん。

2011年：(株)エマリック国立 菱沼勇介さん

2012年：一社 調布アイランドクラブ 丸田孝明さん

そして、2013年は「この人だ！」と思う人の話を昨夜聞いた。吉祥寺の武蔵野映画社・そして、おふくろ屋台 松江勇武さんだ。

7年前かな、全くのゼロからある映画監督の応援でお金の工面をし、かつ興行を成功させる。初めての経験から始まり、ホップ・ステップ・ジャンプの形で前人未達の「地域発映画」の道を切り開いている。

彼の話しぶりは、「熱烈」ではない。きわめて危ない橋を渡っていることを穏やかな表情で四国弁(?)で語る。この穏やかさが尋常でない自信に満ちている。

独特のバランス感覚を保ちながら舵を切っているからなのだ。

今夜、じっくり聞いてよく解ったのが、「寝ても覚めても、地域の記録”映像”を取り続ける」という彼の情熱。日常の時間の大半を執拗に自分の足元の「ハモニカ横丁と中町通り」の時々刻々」をアーカイブし続ける。

「時間の・季節の・時代の移ろい」を撮る。吉祥寺でそれをする人は世界で彼だけなのだ。

「どんなに渋谷駅や下北沢の異変があろうと撮りに行かない」。それは他の人にまかせる。

その時間、吉祥寺を撮れなくなるのを許さない。

危ない橋で、5本の映画作品を世に出し興行した。彼の自信のベースに「映画を作る間に吉祥寺の街の変化の記録を撮り続けている」ことがあるらしい。

「記録を撮る」は、絶対の証言ができるように過去を映像に定着することに役立つ。写真を文章で説明したもの、地図の記録も本当とは違うことがある。ここに、本人の証言を過去のアーカイブ映像とともに提出すれば、本当のことが実証

される。

ハモニカ横丁の屋根を見下ろす彼が、

「他の人間が絶対にしないことをする」個性・情熱はここで、料理を出し続けることを含めて ” 吉祥寺の目” にある。

この仕事のあり方・・・すごい個性, 情熱だな。

この仕事観は、どこかで読んだな、と思った。

そうだ!、ベストセラー本「WORK SHIFT」で、著者グラットンが説いている” 第3のシフト：大消費から情熱を傾ける個人経験へ” ではないか。

私は、この本で、第一のシフト「連続スペシャリストたれ」については、自分が実践していると思って読んだ。第二のシフト「協力して起こすイノベーション」は、自分も多摩CBのヒーローたちも大いに実践していることだと感じて読んだ。

しかし第三のシフト「大量消費から個人が情熱を傾ける経験へ」は、良い事例が思いつけずよく解らなかつた。それが、この松江さんの「映像アーカイブ、を映画に結びつけ、かつ映画とは全く違うものとして切り離し、実行し続ける自分だけの情熱」という、武蔵野映画社の仕事ぶりであると感じる。

その翌日、アーカイブの作業現場を見せて頂いた。

私はその作業は素人で特別の思い入れは無いが、起業した松江さんの「映画人と映像記録屋の” 両輪論の実践”」に惹かれる。

【人のつながりを展開】

14. 人のつながりを分科会で。「CBブロガー」「2地域居住」。

多摩CBも最近の5年間は、CBの活発化が進んでいる。

そこで、更なる人のつながりつくりのため、「シンポジウム分科会」という盛り上げ方法が考え出された。

年一度のシンポジウムの前に、各地でテーマ別のフォーラムや交流会を開催するもので、2012年、13年、15年、16年、17年と5回行われ、合計で16の市で、なんと72回も開催された。

世話人会が実施を呼びかけると、それぞれの地域ごとに主催団体（NPOが多い）が名乗り出て企画を凝らし開催する。全体で広報案内するので、多摩全域から各地へ人が集まり、実にユニークな内容の感想が、参加者のフェイスブックにレポートされる。2～3ヶ月感が騒然とする分科会月間になる。

小規模な10数人での開催があるし、100人以上集まるものも多い。総計では毎回1500人は人が交流している。これにより多摩地域全域が「顔の見える地域」になって実際に出会う個人交流も盛んだらう。

私が忘れられないのは、2013年に三鷹CB研究会とブログプロバイダー「たまりば」の大熊さんと連携で開催の「CBブロガーフォーラム」。

CBプレーヤーとネット企業が組んで多摩全域の人の輪を編んでいる場だと実感した。

もう一つは、2015年の好齢ビジネスパートナーズで開催の「地方創生アイデアソン」。国の提供するRESASビッグデータを活用した事例で都会の三鷹市と茨城・笠間市の連携をどうあるべきかを議論した。

この動きや交流の中で、私は「2地域居住」の実践に気が付く。

「次のテーマは何なのか」を考えさせてくれる場が多摩CB分科会であったといえる。

人のつながりづくり。行動する人の交流。それが多摩CBである。

今回、多摩CBシンポジウム2019も、「未来」を気付かせてくれるはずだ。今年も私は楽しみに自由学園キャンパスに参加する。

(完)